

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その七）



海老沢 敏

六、《メリッサ》と《ルソーの新ロマンス》

すでにくりかえし触れているように、《グロージュ音楽辞典》の

初版ならびに第二版には、《ルソーの夢》の旋律が《四半世紀前に（まことにわずかな変化を伴って）》見出されると指摘されている。ほかならぬ《メリッサ (Melissa)》なる歌曲である。これはすでに第四章でも《大英博物館印刷譜所蔵目録・一四八七年——一八〇〇年》に収載されていることを述べたものであるが、

譜例①のような英語による歌曲である。

ハーブないしピアノの伴奏によって歌われるこの歌曲の歌詞はチャールズ・ジェイムズのものであるが、以下のような内容をもっている。

いとしのメリッサ、美わしの乙女よ！

君なしですごすのがどんなことかわかるだろうか、

こんなにすばやく萎しぼんでいく花にきくがいい、

なぜその色はや輝きらやきを失ななうかを？

やがて萎しぼれゆくバラは溜息をつくだろう、

美わしい人は去り、すべてが死んでいくと。

▼譜 例①

MELISSA

Andante

Sweet Me - li - sa, love - ly ma - i - den! Wouldst thou know what
ab - sence does, Ask the flow'rs so quick - ly fa - ding
why its tint no lon - ger gleams? Soon the drooping
rose will with, beau - ty's gone and all things die.

バラも大空もしとどの涙をしたたらせずとも、
美わしの人去りしを嘆き、

かのひとの不在をいたく悩む、

若者が独り身にやつれるように、

彼は秘めた苦しみを感じ

嘆きながら、しかもなおその謂れを秘している。

愛するひとが去っていった悲しみや苦しみを歌うこの歌曲は、
アンダンテ、へ長調、四分の二拍子を取り、いずれも反復される
前節八小節、後節十六小節の二部からなり、形式的には第一部の
旋律が、第二部後半で再現するA—B—Aの三部形式をとってい
る。

この歌曲について、《大英博物館印刷譜所蔵目録》では《ルソ
ーの夢の節に合せて》と説明を加えており、また、《グローヴ音
楽辞典》も《ルソーの夢》のへわずかな変化を伴った形を考
えている。グローヴ自身はこの歌曲とルソーの《村の占師》中の
旋律との関係を指摘していないが、第二版では、この歌曲の旋律
が、このオペラの第八場の《パントミム》に出てくるものである
と述べている。《村の占師》の黙劇による劇中劇の音楽、いわゆ
る《パントミム》の冒頭に出現するこの旋律は、すでに第四章の

▼譜例②

Pantomime

The musical score is titled "Pantomime" and is written for voice and piano. It consists of several systems of music. The first system includes the lyrics "Pivemou ri do tachi" and "dome jou". The second system includes "Entrée de la Villagorise". The third system includes "Forte". The fourth system includes "Basso". The fifth system includes "66" and "dome jou". The sixth system includes "doux". The seventh system includes "doux". The eighth system includes "doux". The ninth system includes "doux". The tenth system includes "doux". The eleventh system includes "doux". The twelfth system includes "doux". The thirteenth system includes "doux". The fourteenth system includes "doux".

譜例③で紹介したが、一七五二年に作曲され、初演されたルソーのこの代表作オペラの版刻譜の初版にふくまれた原形を譜例②で紹介しておく。この《パントミム》はルソー自身《告白》の第八巻で述べているように、一七五二年十月十八日のフォンテーヌブロー宮でのルイ十五世御前演奏による初演時には書かれておらず、翌一七五三年三月一日、パリのオペラ座での公開初演までの

あいだに作曲されたものであった。

ルソーの《村の占師》は、のちに十二歳の少年モーツァルトの愛くるしいジングシュピール《バステイアンとバステイエンヌ》(K五〇〇＝K四六b)のモデルとなった牧歌劇であり、この一幕物のオペラ、あるいは幕間劇自体、その構想、様式などオペラ史上、きわめてユニークな作品である。そのようにオペラに含まれ

た《パントミム》もまたルソーのユニークな着想であった。従来のオペラでは、劇中にはなやかできらびやかなバレエがつきものであったが、ルソーはそうしたものに代えて、この黙劇を考案したのだ。この黙劇の女主人公の村娘がまず登場してくる冒頭で、この旋律がオーケストラによって奏されるのである。曲は《急がずにはつきりと》と指示されたト長調、二分の二拍子のもので、形式の点からはA—A—B—C—D—D—A—A—D—Dといった四小節単位の構成を見ている。

これに対して《メリッサ》はどのような関係にあるのだろうか？ 形式上は原曲のAの部分（四小節）で八小節の第一部を構成させ、そのあとBをいくぶん変化させて第二部の前半を形づく（B）、フェルマータで結んだ上で、Aを再現させるといわずで述べたA—B—Aの三部形式である。周知のようにいわゆる《歌謡形式》と呼ばれるものである。

さて、《メリッサ》は《大英博物館所蔵目録》では（二七八八年？）と出版年代が推定されている。この歌曲のタイトルの下に《J・デイルのために印刷》とあり、かつ《ハノーヴァー・スクエア向いのオックスフォード・ストリートの楽譜店》と記されていることから、この楽譜がロンドンの著名な楽譜・楽器商ジョゼフ・デイル（一七五〇—一八二二）の出版になるものであるこ

と、そしてこのデイルがオックスフォード・ストリート一三二番地に店を出したのが一七八六年であることから、《一七八八年？》という推定が根拠のあることがわかるのである。

ルソーの《村の占師》に収められた器楽曲の旋律が、このように英国でいつしか恋人の不在を悲しみ嘆く一曲の歌曲に変身しているのが見出されたわけであるが、どのようにして、こうした私たちでの移入がおこなわれたものであろうか？ 第四章で紹介したように、《グロウヴ》第二版におけるフラッドの説明では、この旋律の英国への導入は、バーニー博士による《村の占師》のフッド・レソ翻案紹介によるものとなっている。

チャールズ・バーニー（一七二六—一八一四）の名は、現在でも西洋音楽史の研究家にはひろく知られている。十八世紀の英国が誇る音楽家であり、作曲家、演奏家としても活躍したが、とりわけ音楽史研究家として名高く、彼の《音楽通史》へ全四巻、一七七六—一七八九）はこの世紀の代表的な音楽史書である。彼はこの著書を執筆するための研究旅行を企てており、その体験が二篇の《音楽紀行》（一七七二—一七七三）に結実しているが、イタリヤ旅行の帰途、パリはブラトリエール街（グルネル街）のルソーの住居を訪れ、この思想家にして音楽家と親しく歓談の時をすごしている。一七七〇年十二月十四日のことである。ルソーと

(THE)
Comic Tunes in Le Devin du Village

OR
CUNNING MAN

Performed at the THEATRE ROYAL in Drury Lane.

Composed by

J. J. ROUSSEAU *Paris 1766*

For the Harpichord, Violin, German-Flute, or Hoboy.

LONDON. Printed for R. B. F. M. N. E. R. Opposite Somerset House in the Strand.

▲ 図 版 ①

バーニーはおたがいに共感的な感情を抱いたらしいが、こうした直接の出会いに先立って、バーニーは一七六六年十一月二十一日に、ロンドンの有名な劇場、ドゥルリー・レインで、ルソーの《村の占師》を英語に翻訳し、《賢い男》(The Cunning Man) というタイトルで、英国民に紹介するという労をとっている。この翻訳(図版①)で、バーニーは原作が一幕八場であったのを二

幕(第一幕五場、第二幕四場)に分けたり、登場人物の名前を変えたり、ルソーのレントァイク(叙唱)をカットしたりなどの変更のほか、出演歌手のために曲を追加するなどの工夫をこらしている。

しかしながら、ロンドンの音楽出版社プレムナーから刊行された楽譜でみる限り、アリアはかなり忠実な形を保っているものである。この点《バントミム》も同様で、その冒頭の旋律も調号、拍子ともとり、旋律線にはなら変更が加えられていない。

この翻案がロンドンで上演されたころ、奇しくもルソーは英国を訪れ、ちょうどダービーの近くにあるウットンに滞在していたのであった。デーヴィッド・ヒュームの招きによるものであり、やがて烈しい仲たがいが二人の思想家を分けへだてるのは周知のことであろう。このようにルソーは英国にいながら、自作の英国初演には立ち会っていない。しかしながら、当時英国の著名な歌手たち(トーマス・アーン夫人、ジョゼフ・ヴァーノン、それにチャンプニス)を配した《賢い男》は、翌日の十一月二十二日に再演されたあと、年内に八回もの上演がくりかえされ、さらに翌一七六七年三月まで舞台にかけられるのである。英国でも、このオペラがかなりの評判を獲ち得たことはたしかである。

《村の占師》が、英国でもかなりポピュラーな作品となったこと

▼譜例③

NOUVELLE ROMANCE DE J. J. ROUSSEAU

dans les bosquets de Cy - thère au - près
de toi cet - à nuit sous un or - meau so - lai -
tai - re un son - ge m'a - voit con - duit. Dieux quels
char - mes quelle y - urresse Vé - nus n'a pas tant d'ap -
pès tu cé - dois à ma ten - dresse j'a - lais
mou - rir dans les bras.

は、一七六四年以前におなじく英国の音楽出版者ジョン・コック
スが《ルソー氏作曲のオペラ〈村の占師〉の愛好歌曲》なる楽譜
を原語（フランス語）で出版していることから推察される。
《バントミム》がそのままのかたちで英国で印刷されたのはこの
バーニーの翻案である以上、《ルソーの夢》のかたちでなく、《メ
リッサ》の旋律形という意味でなら、《グロヴ音楽辞典》の説
明はけっして誤まりとはいえないであらう。
だが、この《メリッサ》に先立って、同じような試みが、すな
わち《バントミム》から歌曲を作る試みが、フランスでもおこな
われているのである。それは、すでに第四章で紹介した《大英博
物館所蔵目録》のエントリーにみられる《新ロマンス》のことだ
である。これは正確には《J・J・ルソーの新ロマンス (Nouvelle
Romance de J. J. Rousseau)》と題され、《キユテラ島の森の茂み
づ (Dans Les Bosquets de Cythère)》という歌い出しをもってい
る(譜例③)。以下、その歌詞を訳出してみよう。

キユテラ島の森の茂みで

今宵、君のかたわらに

一本榆の樹の下に

夢が私を導いてくれた。

ああ！なんと美しく、なんとうっとりすることだろう、

ウィーナスにもこんな魅力はない。

君は私の愛に敗れ、

私は君が腕の中に倒れ伏した。

でも見張りを絶やさぬ愛の神は、

私の幸福にねたみを抱いて、

幻は去り、私は目覚める。

君はもう私の心にはかない、

すべては私の夢とともに光を失ない、

そして、ああ、なにひとつ残りはしない、

このいとしい幻のうち、

私の恋の焰と君の美しさのほかは、

ああ、私の無上のよろこびである君よ、

この日、君の正当な権利を行使して

私を憐れんでくれて、

愛の神を君に服従させ、

私の心からの烈しい愛を鎮め、

私の恍惚とした心に、

空想のひと夜、

真実の時を与えておくれ。

このテキストは、幸福の島で、夢を夢み、愛するひとをかきい
だくが、愛の神の嫉妬がその夢を打ちこわしたあとの絶望のうち
に、愛するものに切に願う事をする恋人の気持を歌っている。

この歌詞がつけられた音楽は、もちろん「*パントミム*」冒頭の
旋律に由来するもので、ト長調、二分の二拍子をとり、A—A—
B—Aという形式をもっている。《大英博物館所蔵目録》によれ
ば、この楽譜の出版は「(パリ、一七七五年?)」となっている。

この年代の推定の根拠は明らかでないが、これはなおルソーが存
命中のことであり、当時ルソーは長かった追放・流浪の不安定な
旅の生活を終え、パリのプラトリエール街(グルネル街、現在の
ジャン・ジャック・ルソー街)の家に閉じこもって、静かな生活
の日々を送っていた時期のことである。

それではこの《新ロマンス——*キューテラ島の森の茂み*》は、
ルソー自身とはどのようなつながりをもっているものであろう
か？ そして、この歌曲の歌詞と旋律、曲全体が、《*メリッサ*》
ともども、どのような意味と性格をもち、またどのような役割を
示すことになるのであろうか？

(つづく)

(国立音楽大学)